

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ヘクソカズラ *Paederia foetida* L. (*P. scandens* (Lour.) Merr.) (アカネ科 Rubiaceae)

連絡先：城西大学薬学部
shiratak@josai.ac.jp

秋も深まり、山々が赤や黄色に染まる頃、山道を歩いていると小さな茶色の果実が蔓の途中から房状にぶら下がっているのを見かけます。ヘクソカズラは、日本全土、中国、東南アジアに広く分布する蔓性多年草で、日当たりのよい山野、草地、道端などに自生し、葉や茎などを傷つけると悪臭を放つことからヘクソカズラ（屁尿葛）とよばれます。花を伏せて置いた姿が灸や花の中の赤い様子が灸を据えた跡に見えることからヤイトバナ（灸花）（「やいと」とは灸のこと）とよばれ、花に唾をつけると、人の体によくくっつくため、かつては鼻の上に花をくっつけて「天狗の花」といい子供のよき遊び道具になりました。かわいらしい花を咲かせる様子や花を水に浮かべた姿が田植えをする娘（早乙女）のかぶる笠に似ていることからサオトメバナ（早乙女花）ともよばれます。英名は *Skank vine*（スカンクの蔓）、*Stink vine*（臭い蔓）といい、中国植物名（漢名）では鶏屎藤とよばれ、いずれも悪臭に由来しています。茎は蔓になり、太くなると木質化し、右巻き（つるの巻き方は上から見るか、下から見るかで逆になります。ここでは上から見て右巻き、つまりアサガオと逆向き）に他の物に絡みつき、葉は披針形から広卵形で蔓性の茎に対生し、葉柄の基部には三角形の托葉がついています。夏（8～9月）、葉腋から短い花序を出し、花弁・花冠は白色、内面中心が紅紫色で花冠は浅く5裂する漏斗形の花を多数咲かせ、果実は、径6mmほどの球形で潰すと強い臭気を放



写真1 ヘクソカズラ（花）



写真2 ヘクソカズラ（花の断面）



写真3 ヘクソカズラ（根と茎葉）

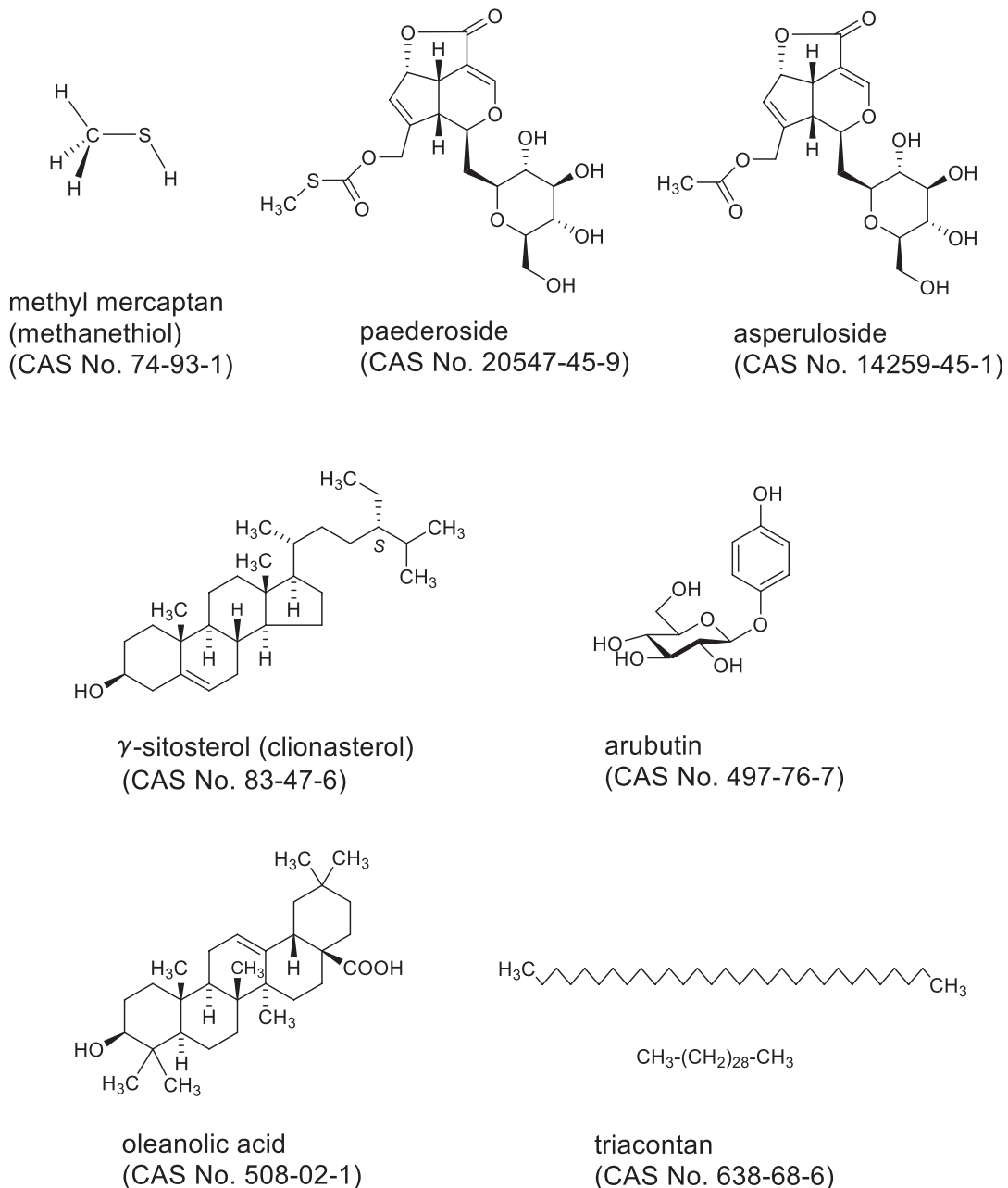


図1 成分の構造式

ち熟すと緑色から黄褐色になります。果皮は萼が変形した偽果皮で果実の中にある2個の核は分果に相当するものです。分果は腹面がくぼむ椀形で表面は粗く、中には1個の種子が入っています。独特の悪臭成分は methyl mercaptan (methanethiol) で、ヘクソカズラに含まれるイリドイド配糖体の paederoside が酵素によって分解されて生成します。なぜ、ヘクソカズラがこのような悪臭のもとになる成分を生合成するかについては、よく分かっていませんが、食害を受ける害虫などから身を守るため（アレロパシー allelopathy^{注1)}）であろうと考えられています。

薬用には、ひび、しもやけ、あかぎれに生や干した果実をすりつぶして皮膚につけたり、腎臓病、脚気に煎じた液を内服する民間療法が知られています。また、晩秋に根および茎葉を採取して天日乾燥したものは、ケイトウ（鶏屎藤）といい、下痢、黄疸に効果があるといわれています。さらに、果実のエタ

注1) アレロパシー allelopathy（他感作用）：ある植物が他の植物の生長を抑える物質を放出したり、動物や微生物を防いだり、引き寄せたりする効果の総称



写真4 ヘクソカズラ (果実)



写真5 生薬 ケイシトウ (鶏屎藤)

ノール抽出液は美肌化粧品としても使用されます。成分としては、全草にイリドイド配糖体の paederoside, asperuloside, 植物ステロールの γ -sitosterol (clionasterol), フェノール配糖体の arbutin などを含み、果実には oleanolic acid, triacontane, arbutin などが含まれています。

諺に、「^{へくそかずら}屁糞葛も^{はなざか}花盛り」がありますが、これは、いやなにおいのため、あまり好かれないヘクソカズラでも、愛らしい花をつける時期があるように、不器量な娘でも年頃になればそれなりに魅力があるということを表し、「鬼も十八、番茶も出花」と同様の意です。

参考資料 (植物の蔓の巻き方)

つるの巻き方は上から見るか、下から見るかで逆になります。ここでは上から見ています。しかし、植物は根本から先端に向けて成長していくので下から見るのが妥当として、近年、左右の巻き方が逆になっている場合があります。

左巻き：アサガオ、クズ、ナガイモ、ヤマノイモ、アケビ、マタタビ、ヤマフジなど

右巻き：ヘクソカズラ、スイカズラ、オニドコロ、カナムフラ、ビナンカズラ、フジ、ホップなど

左右どちらもあり：ツルニンジン、ツルドクダミなど